

『文化財と技術』

第1号

特集〈古代金工・木工技術の復元研究〉

新山古墳帯金具・珠城山3号墳杏葉・鏡板、新沢327号墳大刀龍文銀象嵌
石光山8号墳杏葉、ウツナベ5号墳輪鐙などの復元製作を通して

2000年7月

特定非営利活動法人 工芸文化研究所

財団法人 由良大和古代文化研究協会
研究紀要 第6集 別刷

2 古代金工・木工技術の復元研究

文化財と技術 第1号 目次

特集＜古代金工・木工技術の復元研究＞

新山古墳帯金具、珠城山3号墳杏葉・鏡板、新沢327号墳大刀龍文銀象嵌
石光山8号墳杏葉、ウワナベ5号墳輪鏝などの復元製作を通して

第一部 復元の目的

古代金工・木工技術復元の企画	千賀 久 97
古代金工・木工技術の復元研究で何を復元するのか	鈴木 勉 103
古代金工・木工技術の復元研究の計画と経過	依田香桃美 110

第二部 どのように復元したか

珠城山3号墳心葉形鏡板の復元製作	松林 正徳 115
珠城山3号墳出土心葉形杏葉と 新沢327号墳出土大刀龍文銀象嵌の復元について	黒川 浩 121
珠城山、新山、石光山古墳出土金工品の復元作業	依田香桃美 126
珠城山3号墳出土・心葉形鏡板、杏葉の鋳について	山田 琢 195
新山古墳帯金具の鋳、及び組立てについて	山田 琢 211
石光山8号墳剣菱形杏葉の鋳について	山田 琢 225
ウワナベ5号墳と長持山古墳の木心鉄板張輪鏝の復元製作	小西 一郎 237

第三部 復元研究から何が見えたか

感性の技術史の提案	鈴木 勉 261
古代彫金技術者の感性的モノづくりについて	
―復元実験によって古代の技術者と技術の心を共有する―	松林正徳 鈴木勉 265
古代技術の復元研究からモノづくりのヨロコビを考える(第1報)	
―「モノづくりの8ステップ」でヨロコビを考える(1)―	鈴木勉 松林正徳 268
古代技術の復元研究からモノづくりのヨロコビを考える(第2報)	
―古代の彫金技術者のタガネの軌跡から喜怒哀楽を読む―	松林正徳 鈴木勉 271
古代金工・木工技術の復元研究を終えて	依田香桃美 275
復元研究の成果を技術史の立場で考える	鈴木 勉 280

＜ 付 録 ＞

1. 復元研究工程計画書	293
2. 復元品の制作に際して採用した工程と技法一覧	298

古代金工・木工技術の復元研究を終えて

依田 香桃美

1 箱入れ作業

復元品が全て整い、工房の後片付けをしていると、鈴木氏から連絡が入った。復元品を桐箱に入れて、その箱ごと納品しようというのである。また、その箱はそのまま飾れるような展示に向くものにしてほしいという話にもなった。保存をするという意味で、大切に箱入れされることは、大歓迎である。私は、桐箱屋に特注で箱を作ってもらう手配をした。また、その発注の後で我々は、箱に入れて固定するための中身の細工を行なった。中身は、スタイロフォームで浮かせた高さに、ビロードの布で覆った板を重ねて、復元品が箱の中程に位置するように設定した。ビロードを張った板には、それぞれ復元品に合わせて固定用の穴をあけ、ゴムの紐を通して裏側で固定した。これで、一層見応えのするものになるに違いない。ゴム通しは、針に太いゴムを通すのが難しく、四苦八苦していると、鈴木氏はライターで赤めた針穴に千枚通しを挿し込んで広げ、いとも簡単に通してしまった。思いもよらぬ鈴木氏の技に、私は驚いてしまった。

5月23日、桐箱屋へ箱を受け取りに行き、全ての復元品は箱の中に納められた。復元品は、ますます威厳を持ち重厚感が増したようだった。

26日、午後1時に上野駅公園口で待ち合わせた我々は、復元品を持って東京国立博物館に無事復元の仕事を終えた報告と挨拶をしに行った。千賀氏も来て、一緒に博物館に行ったが、実はこの時の様子を私は詳しく覚えていない。確か、宮内庁から（新山古墳出土の帯金具は宮内庁の所蔵品である）担当の方が2人程見えて、東京国立博物館の古谷氏を交えて話をしていたことだけは、覚えている。それと同時に、張り詰めた雰囲気の中、喉が乾いていた記憶もまだ残っている。この日は、そんなに緊張していたとは思えないのだが、それとも連日の復元作業から開放されて、安心した途端に記憶が途切れてしまっているのだろうか。確実に、思い起こせるのは、千賀氏が復元品を持って関西まで帰るという話をした後からである。箱は非常に大きく、2つ重ねただけで大風呂敷で包むのがやっとという大きさだったため、千賀氏が電車で持ち帰るという話で我々は心配になってしまったのである。鈴木氏は、車で関西まで運びましょうかと提案したが、千賀氏は一笑して大丈夫だと言った。

2 祝杯

この日の帰りに、千賀氏や古谷氏を交えて復元に関ったメンバー全員で祝杯を挙げた。古代の工人たちも私達同様に祝杯を挙げたに違いない。今回の復元作業で、仕事に関った全員が一同に顔を揃え

たのはこの時が初めてであった。古代の工人達もこうして皆で語り合うことで、次の仕事への意欲を固めていったのではないだろうか。大変良い時間とおいしいお酒であった。黒川氏は、完成品をこの日初めて目の当たりにしたそうである。私は、他に仕事が残っていたため、お酒の席へは少々遅くなって参加したが、席に着くなり「いやあ、依田さん良く頑張って、仕上げをやってくれたねえ、彫ったイメージがそのまま鍍金になったよ。」という黒川氏の言葉に涙が出そうになった。私はこの言葉を非常に嬉しく、素直に受け取った。千賀氏は日帰りの予定だったが、我々は強引に引き止めた。私はこの大らかな感性を持つ千賀氏と、もっと話がしたかったのである。その夜は、居酒屋の後カラオケ屋も梯子して全員が歌った。

6月12日、我々は復元品を持って、奈良国立博物館へ挨拶と無事に全ての復元が終了したことを報告しに行った。この日は、初めてこの博物館を訪れた時と同様に、晴れて気持ちの良い日だった。我々は再び井口氏に会い、お礼を述べた。井口氏は、珠城山3号墳のオリジナル杏葉・鏡板を用意して、我々のために、非常に感動的な場面を設定してくれた。なぜなら、オリジナルと復元品を隣に並べて見るという、夢のようなことが実現したからである。まず、オリジナルが箱から出された時に、私は何とも言えない懐かしい級友に会ったような気分がした。観察していた時よりも、数段愛着が沸いているを感じた。(山田君も同様だったそうである。)次に復元品が箱から出され、オリジナルの横に置かれた。私は、胸の高鳴りを静めるように深呼吸して、恐る恐る後ろの方から眺めた。厳しい目で比較すると、やはり全体よりも、自分の手掛けたフレームだけが異様に気になってしまった。オリジナルに比べて、復元したフレームの立ち上がりの傾斜がきつすぎるように感じられたからである。あれほど多くの時間を観察に費やし、身近に感じられていた遺物が、急に手の届かないところへ行ってしまったような感じだった。それと同時に少々がっかりもした。私はまだまだ技術的に未熟である。

組み上げ時の鉦をかしめる際に心配していた鉦頭の潰れ具合は、以外なことにとても良い仕上がりと感じた。

さて、全て終わったかのように思えた仕事も、この12日から14日までの関西への日程の中で話し合われた展示の方法により、完全に終わった訳ではないということが明らかになった。リニューアルオープンは、10月である。まだまだ時間があり、より理想的な展示にするために我々が行なったのは、記録の撮り直しと作業工程の説明図作りだった。足りないと思われる記録は、改めて撮影することになり、説明図は各々が作ることになった。撮影は、一人で作業する我々にとって永遠の課題である。作業の片手間で撮影するなど到底不可能な話だからである。幸いにも私の工房は8人いたので、誰かに頼んだり山田君とお互いに撮影し合うことができたが、それでも十分な量では無かった。「撮影は、やらせて行きましょう。」という鈴木氏の掛け声と共に最後の仕事が始まった。鈴木氏は撮影のために、毎週末東京中を車で走り回ることになった。日によっては、2箇所以上を掛け持ちで撮影しなければならなかったからである。6月28日、3時から行なわれた最後の撮影(イカの餃子巻き)が終り、完全に全ての仕事が終了した。

3 技術の復元か復元品の製作か

1年以上作業をしてきて、当初計画していた技術の復元から復元品の製作へ、僅かではあるが移行したのは言うまでも無い。報告文を読んでいただいた通り、最終的な決定打は、全て展示の時の見え方にゆだねられたからである。復元者にとって、常に仕上がりの際の見え方を考慮して作業を進めることは、自然なことであり、オリジナルから読み取ることのできない技術は、想像力と完成時の見栄えに頼らざるを得ないのは、当然のことである。また、それは受けた仕事のクオリティーを高めるためにも、必要なことであると言えよう。しかし、これは私にとっては少々反省すべき点ではなかったかと考える。古代の技術を表現しようとした場合、展示の際の見え方にこだわってしまうと、現代人の感覚が自然とその復元品に入り込んでしまうからである。今回の私のケースを挙げると、珠城山3号墳の杏葉や鏡板の金の磨き仕上げなどは、正しくその典型であることが言える。金銅製フレーム・金銅製肉彫り透かし板・金銅製地板を重ねて鋳で組んだ場合の金の見え方については、展示の際の照明や光の反射によってどう見えるかと、非常に悩んだからである。古代の技術を再現するならば、博物館展示のように台上に置くことよりも、馬具として装着されていた時のようにどこかに吊り下げて、どう見えるかを考えて行く方が望ましかったはずである。また、光の反射についても電気照明の下ではなく、外の明るさで考えて行くべきだったのではないだろうか。今回の杏葉や鏡板については、結論として4種類の金为重なった時に、肉彫り透かし文様が最も美しく引き立つように仕上げた。私自身この選択においては、あまり矛盾を感じることもなく、古代においても同様に文様を際立たせるように仕上げ作業を行なったことを想定しているが、これについても推測の域を越えない。

復元者にとって何をどこまで復元するのかは、大変重要なポイントである。今回の復元においては、技術の復元が主題であったが、文化財を展示品として作る場合にも、そのクオリティーを高めるために、我々のような技術者が展示品をつくることに大賛成である。また、展示の際の見栄えという点においても技術者のこだわりが必要なのは言うまでもないことである。しかし、現代の技術者によって行なわれている復元は、必ずその人の性格や癖が復元品に現れてしまうと言っても過言ではない。技術者にとって、この自分の癖を表に出さないように作業を進めることは、至難の業である。従って、最初に計画を綿密に練り上げておかないと、作業に没頭したり苦勞するあまり、出来上がった品物が見え方の良い方へと方向転換されていってしまうことも少なくない。苦勞して復元した技術は、なるべく素晴らしく見せたいというのが技術を持つ者の本音でもあるからである。

上記のことは、大変厳しい意見だと鈴木氏に指摘されたこともあるが、自分自身が「モノづくり」として作品を作り続ける以上、研究実験と復元品（展示用）を分けて考えるのではなく、古代の技術を探る延長線上に、復元品を置きたいと考えている。

4 古代の技術を語るために

今回の復元作業で、疑問や葛藤があったのは前述した通りだが、この経験こそが我々の宝物である。「古代の技術」という、一くくりにされてしまいがちな技術も、遺物や時代によって大変異なり、いくら復元を手掛けた経験があったとしても、作業は初めての経験になってしまうことが多い。この場合には、熟練した技術を持つ古代人の遺物を復元するのは大変困難であり、復元者である我々にとって最も必要不可欠なのは、探究心と忍耐力の2つである。これらを持ち合わせない限り、いくら現代において優れた技術を持っていようとも、最終的な「古代の技術の復元」という目的地は遠いのである。

さて、我々が長い時間を調査に費やし、実験や経験を積み重ねてやっとの思いで追求した技法であるが、これに対しての反論や叱咤は大歓迎である。なぜなら、我々の行なった復元作業は「古代人が行なった可能性の一例」ということだけを物語っているからである。私が、今回の復元作業を敢えて「古代人が行なった可能性の一例」と記述したのは、決して謙虚な気持ちからだけではない。技術者を含め、古代の技術を軽視したり理論だけで片付けようとしている人々の意見に、反論したいからなのである。なぜなら技術とは、憶測や想像では何一つ語ることはできないものだと、私自身が痛感しているからである。想像上でできる技術と実際にできる技術とでは、かけ離れすぎている。これは、今回我々が計画書通りに進められなかったということでも、充分証明していると言えるであろう。また、技術とは実験のデータだけでは再現できないということも、今回の復元で実感したことである。実験とは、あくまでその一つの事柄についてのみ言えることで、今回の復元品のように、多種多様な技術が絡み合って作られているものの場合、当てはめられないことも多いからである。技術の追求は、お互いに影響しあっている技法や、背景に在る歴史の前後関係まで踏み込んで、初めて分るものなのではないだろうか。技術者と研究者がお互いに手を組み、三位一体となって行なえば、本当の意味での復元研究が可能になると信じている。そのような意味では、我々のように古代の技術研究者が協力し、行なった復元作業で、復元品製作という歴史の1ページに一石を投じることができれば本望である。

今回の復元技法に関して、私はかなり声を大にして言いきってしまった部分もあるが、今後も引き続き、行なった技法について検討し直してみたいと考えている。

5 今後の展望

現在、博物館のあり方や役割が、色々な観点から注目されていると言えよう。わが国の大切な歴史や文化を支えるこの機関に対して、人々はもっと関心を示すべきだとも言われている。そのために、今回の仕事は展示の仕方についてもこだわったのだが、それが観覧者に明確に伝わっているのだろうか。以前、訪れたどこかの博物館で、「何だニセモノか!」と言って去って行った人を、再び呼び止めるような力はあるだろうか。非常に気になるところである。

観覧者にとって、本物か否かは非常に興味深い点であると言える。しかし、展示の方法でそれを超えるようなものがあれば、納得し立ち止まってもらえるのではないだろうか。今回我々が言いたいのは、あくまでも古代においてどう作られたかという疑問の投げかけであって、答えは観覧者自身が探し出すものであると信じている。復元品の展示は、決して「現代でもこれだけの技術を持った人がいるんですよ。」ということでは無い。主役は、古代の技術なのである。しかし、世の中への流通はまだまだ遠く、復元における言葉の違いも認識されていないのが現状である。「復元品」「模造品」「レプリカ」「コピー」「現状復元」「想定復元」など。まだまだあるが、これらの言葉の使い分けと、正確な意味を世の中に流通させ、人々の関心を起こさせるのも博物館や、それらの仕事に関わる人達の大切な任務ではないだろうか。

今回のこの樫原考古学研究所附属博物館の展示方法は、非常に画期的だと思われるが、今後同じような展示を目指す機関への、道しるべの役割を果たせることを強く願っている。そして、その役割の中にほんの僅かだが、加わることができた幸運に感謝している。

文化財と技術 第1号

2000年7月10日 印刷

2000年7月15日 発行

2004年7月15日 第2刷

編集	鈴木 勉
発行	特定非営利活動法人 工芸文化研究所
代表	鈴木 勉
発行所	特定非営利活動法人 工芸文化研究所
理事長	鈴木 勉
	東京都品川区上大崎1-9-4 (〒141-0021)
印刷所	有限会社 平電子印刷所
	いわき市平北白土字西ノ内13番地